インド通信

第465号 - 2017.7.1 -

インド文化交流センター

〒143 東京都大田区山王1-13-7
臼田わか子気付TEL(03)3772-0960

インド通信版

GAZETTEER OF SOUTH ASIA

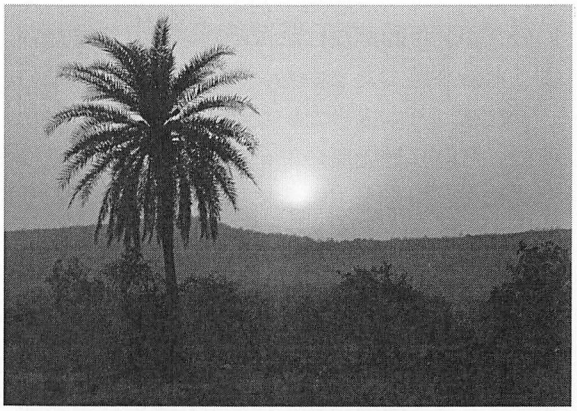
＜南アジア地誌事典・第240回＞

プネーの路地にて

大島　智靖

ムンバイから東南へ180㎞ほどの学際都市プネー。初めて訪れたのは2012年の夏である。ちょうど雨季に差し掛かった頃で、比較的標高が高く気候が穏やかなためムンバイのような洪水被害もなく、毎日サラサラと一定時間緩やかな雨が降り、時折太陽が顔を出す。雨季というと激しく叩きつける雨を想像していたので拍子抜けであった。街行くインド人は皆折り畳み傘を片手に携えており、その姿が意外で愉しかった。そもそもフィールド調査とは無縁だった私が渡印できたのは、大阪大学の短期海外派遣プログラムのお蔭だった。

日本でも路地歩きが趣味だった私は、プネーに行ってもすぐに路地歩きを始めた。フィールド調査とは名ばかりである。プネーは比較的都会で高級住宅街も多く、私が滞在したコートゥルッドやワルジェーもやはり富裕層が多く住むソサイエティである。だがひとたび細道に入れば、そこには「アジアの路地」が広がっている。日本の路地はどこも過疎化が進んでいるが、さすがはインド、奥まで入り込んで行っても人が多い。路地に入ったつもりが思いがけずローカル色満載の賑やかな商店街に出たりして、夢中で歩き回ったこともあった。デリーやムンバイと違ってシャイな人が多いプネーでは、異邦



人はジロジロと見られはするものの話しかけられることはほとんどない。

プネーの2月から3月は、一年で一番良い季節だと思う。深刻な空気汚染は無視できない問題ではあるものの、来る日も来る日も雲一つない青空が広がり、微かな風がなびく。日中の気温は35℃にもなるが、ひとたび木蔭にでも入れば心地よく、人も犬も実に気持ち良さそうに昼寝している。夕方がまた格別で、陽が沈むと一気に涼しくなり、夜7時前後をピークに一斉に人々が繰り出してきて、これに帰宅ラッシュも加わって町は祭りかと勘違いするほどの活気に充ち溢れる。空き地では、暗くて見えなくなるまで子供がボールを追いかける。まるで昔の日本の光景ではないか。こんな異国の地で郷愁の想いにかられるとは思わなかったが、私の一番好きな時間帯である。

お気に入りの場所は数知れずあるが、特に因縁深いものは二つある。一つはワルジェーにあるシッディヴィナーヤク・ソサイエティ。ここには私がヴェーダ祭式を見学させてもらった婆羅門のスダーカル・クルカルニーさんが住んでいる地域である。グーグル・マップでも空白地帯だ。カルウェー通りからムンバイ・ハイウェイをくぐった所にあるマルワディというバス停の手前を北に上がるとマトンを売る店が並び、そこから一気にローカル色豊かな雰囲気になる。その先でもう一度北にそれて細いグラベルに入ると、いかにもインドらしい質素な造りの住居が立ち並ぶ路地に至る。一瞬「しまった」と思うような閉鎖空間で、これがたまらないのだが、目的がなければ絶対に入り込まないような袋小路であるから、緊張感は途切れない。

「なぜ（日本人みたいな顔の人間が）こんな所に」という地元民の好奇の眼をかいくぐりつつ（私など相当な不審者に思われたことだろう）進むと、最奥にあるクルカルニーさんのお宅に辿り着く。3階立てのシンプルなビルのような四角い家だが、ひんやりとしたコンクリートやタイル、そこかしこに置いてある木製・銅製の祭器、そして厨房に見事に並んだメタル製食器等が、この建物の印象を決定づけているように思う。木や畳をふんだんに使った伝統的日本家屋に出会ったときのような感覚と似ているだろうか。屋上はシュラウタ祭式の祭場となっており、2012年には、半ば偶発的に生じたデカン・カレッジのサテー教授との縁のお蔭で、ヴァージャサネーイン派の新月祭を見ることができた。

都市部の婆羅門の系譜はもはや伝統的なものではなくなってきているが、クルカルニーさんもヴェーダ学校の師について学んだクチである。それでも兼業婆羅門が多い昨今にあって専業でやっているのだから、貴重な存在である。その後 2015 年に訪れたときは、プネー大のムレイ教授との縁がきっかけで、夕方のアグニホートラを見た。今春3度目の訪問ではクルカルニーさんが突如バナーラスに出張してしまうというハプニングに見舞われたが、思い切ってアポなし訪問をしてみると長男のナチケート君が快く迎え入れてくれた。インド人は時間にはルーズな代わりに（？）不意のゲストでも歓待するという伝統を持っているというが、そのことを実体験することができた次第である。人との繋がりというのは有難いもので、フィールド・ワーカーでもない自分が、コネがなければ決して近寄ることもない入り組んだ路地の奥でチャーイを啜っていると思うと何だか不思議である。

さてもう一つのお気に入りは、デカン・ジムカーナーからムタ川に架かるサンバージー橋詰を起点として東へ走るラクシュミー通りだ。賑やかなメイン・ロードの一つなので路地とは言い難いが、周辺は路地の宝庫なのでプネーに行けば必ず散策する。着物、履物、祭具、本、工具、バイク用品など様々な職人の街といった趣きで、何時まで歩いても飽きることがない。そしてこの途中に、ブドゥワールと呼ばれる異様な雰囲気の一角がある。いわゆる赤線地帯である。さすがに路地好きの私でもここに踏み入る勇気はない。

この一角に差し掛かると、細い路地の奥から

一目でそれと分かる化粧をした売春婦たちが「プシッ」と口を鳴らしながら手招きをしてくれるのだが、私にとってはラクシュミー通りの風物詩だ。初めて通りがかったときは面白い一角を見つけたと密かに喜んでいた程度であったが（何度でも強調するがここに踏み入る勇気はない）、そこがブドゥワールと呼ばれるインド有数の売春窟であるということを知ったのはつい最近のことである。

プネーには、ヴァンチット・ヴィカースという貧困者や性産業従事者などの支援を行っている団体が存在する。創設者のツァーフェーカルさんは、私がインドで家族のように世話になっているチェータナ女史と大学の同窓であり、その縁でヴァンチット・ヴィカースの紹介 DVD を観る機会があった。そこでブドゥワールの人身売買問題や女性たちの子育て問題など、インドの抱える巨大な闇の実情を知るに及び、ブドゥワールは興味本位で覗くような場所ではなくなった。汚い路地と、腕組みして壁によりかかるどぎつい化粧の女性たち。この光景は、とても原始的な感じがして、ある意味神々しく見えるのだ。しかしその奥に広がるのは人権もへったくれもない恐るべき世界である。そこで生まれた子供もまた、売春窟を出ることなく一生を終えることが多い。

ヴァンチット・ヴィカースはそのような惨状を少しでも改善するために様々な支援を行っているが、それにしてもインドの人権意識は本当に低い。このような負の遺産を見るにつけても、ヴェーダという人類史上有数の知的遺産の研究者の端くれである私の胸中には複雑な思いが去来する。どうやら渡印の回数が増えるにつれて私の意識や関わり方も変わってきているようだ。

写真　・プネーの夕暮れ
　　・厨房の食器類

おおしま　ちせい：中国学、インド学・仏教学を学んで早幾年。ヴェーダのブラーフマナ文献における神話解釈学を主な研究領域とする。フィールドに出るより概念の世界を逍遥する方が向いていると思っているが、なぜか最近毎年のように渡印している。現在、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター特任研究員。